

サゴヤシと生きる村スンガイ・トホールを訪ねて

神前進一

3月初旬に泥炭地保全の先進地視察のために近藤美沙子さんと二人で、スマトラ島東岸リアウ州メランティ諸島県トゥビンティンギ島にあるスンガイ・トホール村を訪問した。まず州都プカンバルの WALHI (インドネシア環境フォーラム/FoE インドネシア) 事務所を訪問し、事務局長のリコさんに話を伺った。トホール村は 2004 年以來 WALHI が継続的に支援を行っており、一昨年は悲願の森林管理権を正式に獲得した。今回の視察では、村出身の若いスタッフのリオさんに同行案内を依頼した。村までは直線距離で 200km ほどであるが、船とバスを乗り継いで県庁都市スラットパンジャンに泊まり、2 日ばかりで行くことになった。帰りはシンガポールに近いバタム島まで船、その後飛行機を使い半日ほどでジャカルタに戻ることができた。

トゥビンティンギ島は全体が 3m ほどの深さの泥炭湿地で、トホール村では住民の手でよく保全された状態にある。トホール村はこの島で最も古く 1904 年にできたマレー系住民の村である。その後多くの村が分かれて独立したため現在では最大の村ではないが、郡役場が置かれている。255 世帯、1,220 人 (2016 年) の村で、面積は 95 km²、人口密度は 1 km² あたり 12.8 人となり、カリマンタン同様に人口密度の低い地域である。統計書によると、サゴヤシ栽培面積が 1,050ha で、他にゴムとココヤシ、ピンロウジュが栽培されているが、全農地面積の 70% 以上がサゴヤシで占められサゴヤシの村として有名である。

サゴヤシはニューギニア島やマルク諸島の湿地に自生し、1 本の幹に 150kg 以上の澱粉を含むヤシで、この地域では主食となっている重要な食糧作物である。数百年以上前にスラウェシのブギス人商人によりもたらされて栽培が始まったとされ、この村では 8 割以上の住民がサゴヤシ栽培に携わり生計を立てている。強酸性の土壌でも塩分濃度の高い土地でもよく育つ、泥炭湿地の環境に適した作物で、アブラヤシやアカシアの植林と違って排水を行わずに栽培できるパルディカルチャー (湿地を損なわずに商業的価値のあるものを生産する取り組み) にうってつけの作物である。しかも単位面積当たりコメの 4 倍以上の 24 トンの澱粉が得られ、1 日の労働で 17 日分の食料が得られるという夢のような作物で、政府も FAO (国連食糧農業機関) も食糧危機の救世主として注目している。



サゴヤシはサッカー(吸枝)で周囲に生長する

隣村の船着場まで迎えに来てくれた若者のバイクの背にまたがり、ココヤシ、サゴヤシ、ピンロウジュと家々の並ぶ道を、村のリーダーでホームステイ先のマナンさん宅に向かう。村から外へ車の通る道はなくバイクが唯一の交通手段であるが、道の状態や家の作りからみる限り、ハラパン村より格段に豊かな印象を受ける。マナンさんは 50 歳前の温和な村づくりリーダーで、彼が組織した EKA という自助組織の揃いの T シャツを着た若者たちと共に私たちを迎えてくれた。

この村には森林土地権の獲得に至るまでの長い闘いの歴史があった。2002 年、この村と周辺 7 か村の 10,390ha に設定されていた森林伐採権を持つ企業により、住民のサゴヤシやゴム農園が損害を被ったため、激しい抵抗運動が展開され、伐採キャンプや前村長宅に放火、この罪で多くの住民が投獄された。これを機に、村がこの土地の管理権を獲得するための政府との交渉を WALHI が支援することになった。こうしたなか 2008 年に産業造林企業がこの土地の開発権 (HTI) を取得し、住民の反対運動にもかかわらず 10km の大規模排水路を建設した。2011 年頃からこの影響で地下水位が低下し、サゴヤシの収量が 3 割ほど減少することになった。住民は暮らしを守るために水路に木製の堰堤 (sekat kanal) を数多く建設し (カナルブロッキング)、泥炭地の地下水位の低下を食い止める保全活動を始めた。住民は WALHI の支援の下、政府にコンセッション取り消しの請願を続ける一方、村を「持続的泥炭地農業のセンター」にする構想を持ち、若い農民を組織し、農



カナルブロッキングを視察するジョコウィ大統領に説明するマナンさんら Green Peace による

苗床設置を行ってきた。

そうしたなか、2014年2月にタバコの不始末から火災が発生し、排水され乾燥化した泥炭地に延焼し大規模森林火災となった。就任したばかりのジョコウィ大統領に視察を依頼したところ、大統領は即座に快諾し、同年11月末にトホール村を訪問した。住民による泥炭地管理に感銘した大統領は「アブラヤシのようなモノカルチャーのプランテーションによって熱帯林が失われるのを許してはならない」と発言した。2016年にはBRG(泥炭地回復庁)長官も視察に来村、マナンさんはインドネシア環境賞を受賞、この村が泥炭地保全のモデル事例として全国に知られることになった。同年、政府はHTI(土地の開発権)を取り消し、昨年4月10,390haの土地の管理権が地元7村に正式に与えられることになった。

村に着いた私たちは早速、マナンさんとEKAの若者たちの案内でサゴヤシの栽培現場とカナルブロッキングを見学に出かけた。村の南はずれの大规模水路に面したサゴヤシ栽培地では数人の村人チームで伐り出し作業が行われていた。サゴヤシは一度植えると10年目に初収穫を迎えるが、以後は根元から派生するサッカー(吸枝)が育ち、3年周期で伐採が可能で、住民は年に1か月だけ伐採作業に従事するという。1戸あたり数ヘクタールのサゴヤシ農園を3分して順に伐採するが、それで十分な収入が得られるという。伐採されたサゴヤシの幹は2m弱で玉切りされ、筏に組んで水路に浮かべて製粉工場まで運ばれる。

この村には川や大规模水路沿いに12か所の住民経営の製粉所(kilang)があり、幹の皮を剥いで立方体に切り、回転する突起の付いた金属板に当て大鋸屑状にして水で繊維質を流し去り、澱粉を含んだ水を貯留槽に流し込み沈殿した澱粉を取り出す。昔ながらの工程であるが、トホール村のサゴ澱粉は高品質で知られ、国内はもとよりマレーシアにも輸出され村の経済を支える産業となっている。

大规模水路はサゴ丸太の筏を流す輸送手段であると同時に、地下水位維持の重要な役割を担っている。住民は水路に何か所もの堰堤を作り、黒褐色の水流をせき止め地下水位の涵養をはかってきた。昨年、中カリマンタン州ブランピサウで見た

sekat kanalより堅牢な作りで、メンテナンスもしっかりされていた。地下水位を観測するためのブイが収められた塩ビパイプも各所に設置されていた。住民は昨年からは、泥炭地を体験するエコツーリズムを始め、サゴヤシ栽培地の見学やカナルブロッキング、苗床づくりなどを現地体験するプログラムとなっている。

マナンさんの生業はこの村唯一のサゴ麺の製造者である。家に隣接した作業所に数名の近所の女性を雇い、毎日朝から半日余りかけて、サゴ麺とサゴ澱粉の菓子 *sagu telur* の製造を行っている。製粉所から購入した湿サゴの不純物を取り除き、固まりにして茹で、捏ねてシート状に伸ばし、また茹でて陰干しし、それを製麺機にかけて半乾燥のサゴ麺を作る。家族総出で夜遅くまで袋詰めをして翌朝、村内や周辺の村の店に出荷している。毎日400g入り250袋を製造、100万ルピア(約8,000円)の売り上げとなる。マナンさん宅では1日に2食はサゴ麺が主食として、さまざまな調理法で出され、とても美味しくいただいた。

マナンさんは多忙な仕事の合間に、若者たちが自立した生計を立てられるような、新しい有機農業の実践圃場を自らの土地を提供して最近始めた。EKAの10人余りの若者たちは毎日、畑作業に集まり、昼間は水やりや管理作業、夜は遅くまで作業小屋で語り合っていた。筆者も日本での有機農業の経験があることを話し、彼らとの野菜談義に花を咲かせた。初めての収穫はキュウリとササゲが種まき後1ヵ月で、ちょうど私が村を後にする日であった。その後もメールで野菜の生育の写真が送られてきて、日本の種を持って行く約束をしている。若者たちが村に留まり多角的な生計を確立し、泥炭地を保全していく営みが持続・発展していくことを願ってやまない。



大规模水路はサゴ丸太筏の運搬に利用、背後はサゴ栽培地



マナンさん夫妻と